様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１１日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2007～2009
課題番号：　１９２０２０１４
研究課題名（和文）　敬語と敬語意識の半世紀－愛知県岡崎市における第３次調査－

研究課題名（英文）　Socio-Psychological Survey on Japanese Polite Expression : The third survey in a longitudinal framework in Okazaki City, Aichi Pref.

研究代表者
杉戸　清樹（SUGITO　SEIJU）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・名誉所員
研究者番号：１００９９９１３

研究成果の概要（和文）：
愛知県岡崎市において敬語使用と敬語意識に関する定点・経年の第３次臨地調査を実施し、第１次調査（1953 年度）及び第２次調査（1972 年度）以後の変化の姿を把握した。例えば、家庭内での敬語使用の減少、場面や相手に応じて敬語を使い分ける意識の増大などを捉えた。併せて、方言敬語の資料や談話資料の収集・分析、経年調査データに基づく変化予測の理論・方法の開拓についても成果を挙げた。

研究成果の概要（英文）：
The third survey in the framework of a longitudinal sociolinguistic study, was conducted in 2008 in Okazaki City, Aichi Pref., Japan, following the previous surveys conducted 35 years and 55 years earlier. The survey aims to answer the following questions; How has the usage of honorific expressions changed in the city over a half century? What are the conditions of changes in the use and awareness of honorifics?

We observed explicit changes, such as a decrease in use of honorifics in private family settings and an increased awareness of switching and suiting one's honorific expressions to the listeners or the referents. On the base of the data obtained from the surveys, we have revised and extended our databases for the longitudinal sociolinguistic studies on the honorific expressions in Japanese language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	14,100,000	4,230,000	18,330,000
２００８年度	11,800,000	3,540,000	15,340,000
２００９年度	10,400,000	3,120,000	13,520,000
総　計	36,300,000	10,890,000	47,190,000

研究分野：日本語学・社会言語学・言語行動論
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：敬語、敬語意識、言語生活、経年調査、社会言語学

１．研究開始当初の背景

敬語の使用と敬語についての意識の在り方は、日本語の実態や歴史を把握したり国語施策・国語教育施策を立案したりする上で重要な論点である。また、人口移動の活発化、地域社会の変容、家族構成の変化、高度情報化など激しく変化する現代社会においては、敬語・敬語意識について静態的な情報としてではなく、社会変化の中での動態として把握することが不可欠である。

こうした課題意識に基づいて、国立国語研究所はすでに 1953（昭和 28）年度及び 1972（昭和 47）年度の 二度、愛知県岡崎市において大規模な定点・経年の臨地調査を実施し、敬語使用の多様化、敬語選択要因や敬語意識の変化を把握した。このような定点・経年の大規模言語調査は世界的に稀な事例である。

本研究を企画・開始した時点では、第１次調査から約半世紀、第２次調査から 35 年を経ていた。この実時間の経過を踏まえて第３次調査を実施し、敬語と敬語意識の変化・不変化を把握することが、学界等において強く期待されていた。

２．研究の目的

以下の目的を掲げた。

(1) 1953 年度以降、国立国語研究所が岡崎市で二度にわたって実施している定点・経年調査（前項）の第３次調査を実施することによって、第１次調査以後半世紀の間の敬語・敬語意識の変容を把握する。

(2) 得られた調査データに基づいて、現代日本の地域社会における敬語使用・敬語意識の実態を記述するとともに、言語の変化と将来予測に関する実証的な研究を行う。

(3) 方言敬語や日常談話の録音資料、市街の文字景観等、調査地の敬語や言語生活に関連する各種言語資料を収集・分析する。

(4) 得られた各種の調査データや分析結果を将来の経年調査実施に向けてデータベース化する。

３．研究の方法

以下の各種臨地調査を実施し、得られた調査データの分析を通じて、前項の目的を達成することを目指した。臨地調査は、調査会社等に委託するのではなく、本研究の代表者・分担者・連携研究者・研究協力者が分担・協力して直接行った。

(1) 経年調査

愛知県岡崎市での定点第３次調査として、次の２種類の臨地調査を行った。質問の趣旨や内容は原則として前２回と同一。

①パネル調査（同一人物への反復調査）
第１次・第２次の各調査の回答者で現住地の判明した岡崎市民（145 名）への個別面接調査およびアンケート調査。有効回答者数 82 名（56.5%）。

②継続調査（無作為抽出した市民への調査）
前２回はそれぞれ 400 人を住民基本台帳から無作為抽出して対象にした。今回は、新たに選んだ 600 人を対象にした個別面接調査とアンケート調査。有効回答者 306 名（51%）。

(2) 基盤調査

経年調査の関心事である岡崎市の敬語や敬語使用に関する基盤的・発展的な情報を求めて次の調査や資料収集を行った。

①岡崎地域の方言敬語や敬語意識を記述するための面接調査

②方言敬語に焦点をしぼった会話録音収録

③言語場面での敬語使用についての詳細な意識を問うグループインタビュー

(3) 新規関連調査

岡崎市民の言語生活・言語行動を観察記述する目的で次の調査を行った。

①街頭で道を尋ねる言語行動の録音録画

②市民の日常的な座談会話の録音録画

③街頭の文字を観察記録する景観文字調査

(4) 調査データの電子化、録音資料の文字化とそれらのデータベース化

上記の各調査、特に(1)経年調査で得た調査データは大量であるが、研究期間内に基本的な電子化・録音文字化を完了しデータベース化を行った。今回の分析研究に利用するとともに、将来さらに実施すべき定点経年調査に向けた保存蓄積を図った。

４．研究成果

本「研究成果報告書」作成段階で得られている研究成果から主な三つを選び、以下に(1)～(3)として挙げる。なお、これらの内容を含む成果報告印刷物として『敬語と敬語意識－愛知県岡崎市における第三次調査』(全 4 冊。2010 年 3 月。非売 品）を作成した。また、各調査により得たデータ・録音資料等の分析は今後とも継続する。

(1) 本研究の主要調査である経年調査から、敬語使用意識の経年変化が把握できた。

複数の質問項目の回答状況を重ね合わせると、例えば「場面や相手によって敬語や言葉遣いを選択し使い分ける」方向への

大きな変化が指摘できる。

①「人称代名詞は時や場合によって使い分ける方がよい」とする意見が大部分の年齢層で増加を続けている（図１）。

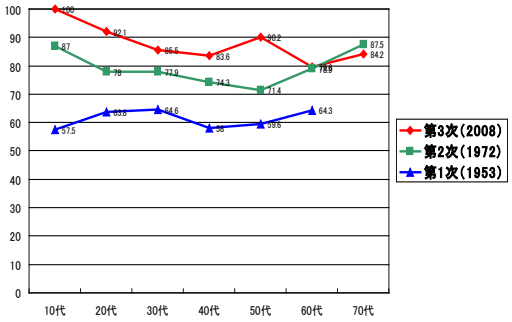

図１　人称代名詞を使い分けた方がいい

②家庭内の年長者等に「敬語を使うべきだ」という敬語使用意識は、全年齢層で減少を続けている（図２）。

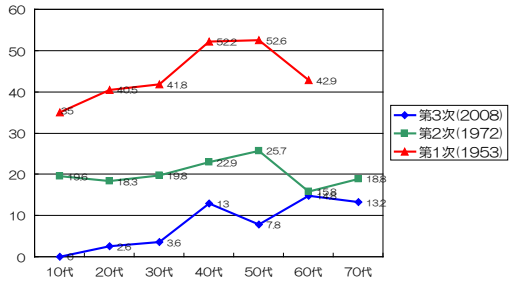

図２　家の中でも年長者には敬語を使うべきだ

③家庭内での敬語使用について「時や場合や相手による」という意見が第３次調査において目立って増えた（図３）。

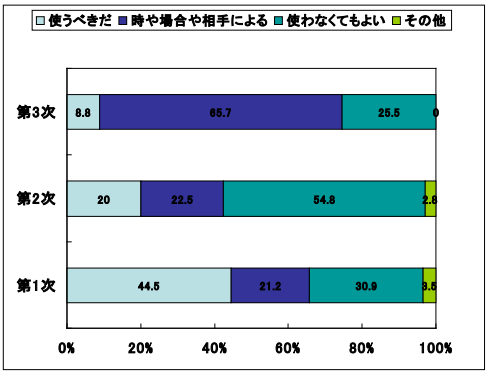

図３　家の中で年長者に敬語は

(2) 経年調査で得たデータを解析する手法について、理論的・方法論的な展開を見た。例えば次の二つは、今回の調査データだけでなく、他の言語調査データ等に広く活用できる可能性を持っている。

①敬語使用意識についての経年調査データを多重ロジスティック回帰分析に投入することによって、過去の経年変化状況から多変量Ｓ字カーブを想定した将来の変化を予測できるとする理論的・実証的な提案ができた（横山・朝日・真田 2008 等）。

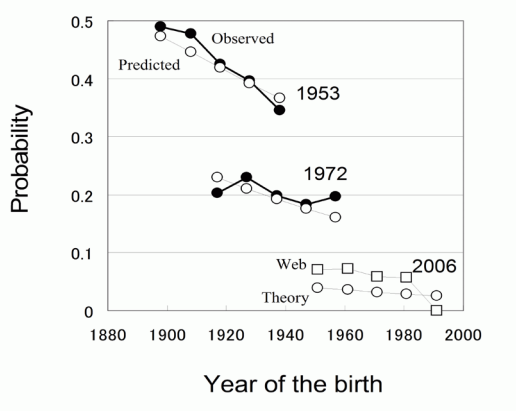

図４　身内敬語意識の変化予測

図４は、３回の調査それぞれで「家の中で年長者に敬語を使うべきだ」とした回答の生年別推移について、調査実測値と多変量Ｓ字カーブによる予測値とを示している。第３次のデータは本調査に先行させた予備的 Web 調査のものである。

この研究は、経年変化を跡付けるデータから将来変化を予測する情報を導き出す方法を積極的に提案して、言語変化研究の展開に貢献した。当該論文は 2009 年度社会言語科学会徳川宗賢賞を受賞した。

②敬語表現形式の分析手法の再構築

第１次・第２次調査の分析では、回答データの分析手法として「敬語形式の段階付け」を用いた。この手法は、具体的な回答文を基準に沿って丁寧度で段階付けするもので、その段階の数値が敬語使用や敬語意識との関連を解析する際に活用された。

過去２回で用いた詳細な基準は明示的には報告されていなかったので、今回、過去２回のデータを改めて精査して基準を抽出する分析を行い、下図のような基準（段階付けのルール。図中の数字が丁寧度の段階点）を抽出することに成功した。

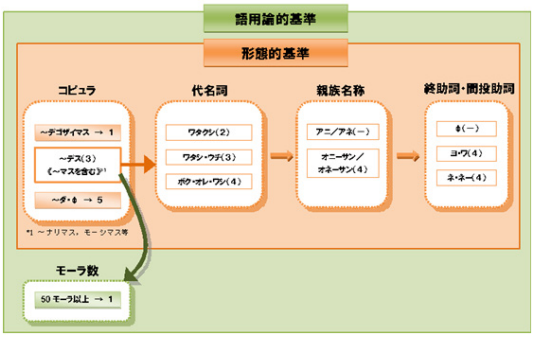

図５　段階付けのルール

この研究により、過去２回の回答データについて、一貫性のある基準を堅持して丁寧度を判定していたことを確認するとともに、第３次調査の回答データ、あるいは同種の敬語調査データを同様の手法や枠組みで解析する基盤を改めて構築することができた。

(3) 岡崎市における方言敬語の使用と使用意識、共通語との併用意識等に関する現状についての具体的な情報を得た。
例えば、①個人による敬語使用の多様性、②尊敬表現（オ行キタ、行カシタ等）の衰退と「～テミエル」の定着の過程、③丁寧語（マス）の重要性などについて、最新の情報を得た。これらは、経年調査の今後の分析にも不可欠な役割を果たす貴重なものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２２件）
①松田謙次郎・朝日祥之・松丸真大・阿部貴人、第22回研究大会ワークショップ報告　同一データの複眼的分析からわかること：岡崎敬語調査３場面の再分析、社会言語科学、査読無、11巻、２号、2009、114-118

②高田智和、行政用文字の調査研究における文字同定―辞書同定と辞書非掲載字に対する文献資料・非文献資料による同定―、日本語科学、査読有、25、2009、131-141

③横山詔一・朝日祥之・真田治子、記憶モデルによる敬語意識の変化予測、社会言語科学、査読有、11巻、１号、2008、64-75

④杉戸清樹・朝日祥之、第 20 回研究大会ワークショップ報告、敬語を経年的に見つめる、社会言語科学、査読無、11巻、1号、2008、183-187

⑤朝日祥之・松田謙次郎、敬語研究と実時間的言語変化研究との接点を求めて、社会言語科学、査読有、11巻、１号、2008、39-50

⑥横山詔一・真田治子、多変量Ｓ字カーブによる言語変化の解析－仮想方言データのシミュレーション－、計量国語学、査読有、26巻、3号、2007、79-93

〔学会発表〕（計３３件）
①高田智和、言語景観を分析し、可視化するには、日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム世界の言語景観・日本の言語景観、2010年1月24日、富山大学

② Matsumaru , Michio 、"Variation and change of honorifics in subordinate clauses" OSHIII: An Interim Report 、Japanese Korean Linguistics 19、2009年11月14日、University of Hawaii at Manoa

③Matsuda, Kenjiro、"Real-time survey, apparent time and lifetime span" OSHIII: An Interim Report 、Japanese Korean Linguistics 19、2009 年 11 月 14 日、University of Hawaii at Manoa

④松田謙次郎・横山詔一・朝日祥之、第三次岡崎敬語調査と見かけ上の時間・生涯変動、JSAA-ICJLE2009 国際研究大会、2009年7月14日、University of South Wales

⑤西尾純二、待遇表現の記述的研究と岡崎調査、関西言語学会第 34 回大会ワークショップ　敬語と敬語意識に見られる実時間的変化－国立国語研究所における岡崎敬語調査から－、2009年6月6日、神戸松蔭女子学院大学

〔その他〕
ホームページ等
http://www.ninjal.ac.jp/okazaki/

６．研究組織

(1)研究代表者
杉戸　清樹（SUGITO　SEIJU）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・名誉所員
研究者番号：10099913

(2)研究分担者
横山　詔一（YOKOYAMA　SYOICHI）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・教授
研究者番号：60182713
朝日　祥之（ASAHI　YOSHIYUKI）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：50392543
礒部　よし子（ISOBE　YOSHIKO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・研究情報資料センター・専門職員
研究者番号：50311155
塚田　実知代（TSUKADA　MICHIYO）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・研究情報資料センター・専門職員
研究者番号：10311151
江川　清（EGAWA　KIYOSHI）
広島国際大学・心理科学部・教授
研究者番号：30000425
（H19→H20：連携研究者）
井上　史雄（INOUE　FUMIO）
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：40011332
（H19→H20：連携研究者）
真田　信治（SANADA　SHINJI）
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：00099912
（H19→H20：連携研究者）
吉岡　泰夫（YOSHIOKA　YASUO）
別府大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：90200948
（H19→H20：連携研究者）
松田　謙次郎（MATSUDA　KENJIRO）
神戸松蔭女子学院大学大学院・文学部・教授
研究者番号：40263636
（H19→H20：連携研究者）
松丸　真大（MATSUMARU　MICHIO）
滋賀大学・教育学部・准教授
（H19→H20：連携研究者）
研究者番号：30379218
西尾　純二（NISHIO　JYUNJI）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：60314340
（H19→H20：連携研究者）
大西　拓一郎（ONISHI　TAKUICHIRO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・教授
研究者番号：30213797
（H19→H20：連携研究者）
尾崎　喜光（OZAKI　YOSHIMITSU）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：10204190
（H19→H20：連携研究者）
熊谷　智子（KUMAGAI　TOMOKO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・名誉所員
研究者番号：40207816
（H19→H20：連携研究者）
高田　智和（TAKADA　TOMOKAZU）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・准教授
研究者番号：90415612
（H19→H20：連携研究者）

(3)連携研究者
米田　正人（YONEDA　MASATO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・名誉所員
研究者番号：20000432
水野　義道（MIZUNO　YOSHIMICHI）
京都工芸繊維大学大学院・工芸科学研究科・准教授
研究者番号：60190659
吉野　諒三（YOSHINO　RYOZO）
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所・データ科学研究系・教授
研究者番号：60220711
松本　渉（MATSUMOTO　WATARU）
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所・データ科学研究系・助教
研究者番号：10390585
片岡　邦好（KATAOKA　KUNIYOSHI）
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：20319172
熊谷　康雄（KUMAGAI　YASUO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：30215016
（H19→H20：連携研究者）
井上　文子（INOUE　FUMIKO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：90263186
斎藤　達哉（SAITO　TATSUYA）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・理論・構造研究系・助教
研究者番号：90321546
鑓水　兼貴（YARIMIZU　KANETAKA）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・時空間変異研究系・プロジェクト特別研究員
研究者番号：20415615

(3) 研究協力者
阿部　貴人（ABE　TAKAHITO）
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・研究情報資料センター・プロジェクト特別研究員
研究者番号：84066226
（H19→H20：研究分担者、H20→H21：連携研究者）
辻　加代子（TSUJI　KAYOKO）
神戸学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：30514723
（H19→H20：連携研究者）
久木田　恵（KUKITA　MEGUMI）
愛知教育大学・非常勤講師